

大きな和で育む子どもの未来 ー沖縄の小児保健の過去・現在から未来へー

宮城 雅也

公益社団法人 沖縄県小児保健協会

地球温暖化をはじめ、感染症パンデミックなど環境の変化は、より厳しい状況となっております。今小児保健関係者が手を結び大きな和で、子ども達の生育環境を守っていくため、小児保健関係者の役割は重要となってきます。そこで本県の小児保健の過去から振り返り、現状を把握し如何に未来に繋げていくのか考えてみたいと思います。

沖縄県における乳幼児健診は、日本復帰の翌年1973年10月に、沖縄県から当協会へ委託されて沖縄独特の集団健診方式で始まりました。医療機関の診療時間外である土日を利用して、小児科医、保健師、看護師、栄養士、臨床検査技師、母子保健推進員、市町村の母子保健担当職員などのチームで行われる集団健診方式です。特に、沖縄県の49の有人島は、東西1000km、南北400kmに及ぶ広大な海域に点在する島嶼県です。離島市町村には、関係機関の協力を得て、小児科医・歯科医師・臨床検査技師・保健師などをチームとして年間計画を基に派遣しました。当時全県53市町村との連携で、離島を含む乳幼児健診の標準化を図ることができました。離島町村に住む乳幼児を持つ親にとっては、貴重な相談機会となり、疾病の早期発見スクリーニングのみならず、親への育児支援などの機会となりました。

1997年より乳児に加え、1歳6か月児と3歳児の健診結果は電子データとして保存が始まりました。10年以上の健診結果データは、2011年10月より山梨大学医学部の山縣然太郎先生との共同研究として、5年間にわたり分析検討を行いました。この研究は乳幼児健康診査から得られる膨大な情報を、母子保健施策への提言がよりエビデンスに即したものであるようにデータを縦断的に解析しました。健診データの突合、喫煙の乳児への影響、育児不安の健診時支援、生活習慣の影響、乳幼児貧血、乳幼児の齲歯状況などを分析し保健指導への根拠を示すようにしました。

母子健康手帳の発行は、交付が市町村に委譲された1992年より当協会が担っており、離島を含む全県統一された母子健康手帳が使用されております。その為県内転居においては、不便さは発生していません。また市町村からの要望もあり、2009年には20歳まで使える親子健康手帳を編集し母子健康手帳として発行しました。その中でも予防接種欄の充実を図ったので、小児科医の使用頻度も高く、健診以外でも診察補助の一面を担っています。

成人の検診事業でも精度管理が求められておりますが、乳幼児健診の精度管理は、市町村単位での分析を行っていくことは大変難しくなっております。全県下で行った精査が必要とされた乳幼児の精査結果を健診診察医に、精査結果のフィードバックを行い診断の精度向上に努めました。また全県下で行われる乳児後期と1歳6か月健診の採血による貧血検査と先天性股関節脱臼スクリーニングの精度管理についても検討しています。

子育て世代包括支援センター、成育基本法、こども庁など、こどもを取り巻く前向きな社会的な動きを成功させるためにも、多職種、多機関等の方が、大きな和を結び、感染症を含む環境破壊の進行から子ども達の未来を守り、本当に明るい未来を育んでいきたいと思っております。今回のテーマは、「大きな和で育む子どもの未来」ですが、「大きな和」は、沖縄のこころ、「ゆいまーる（絆回るで相互扶助を表す）」を表しており、皆が協力しあうことで子ども達の未来を拓いていくことを表しております。大きな和は、多種多様な人達を快く受入れていく大和（古来日本）の心「和の心」表しております。大きな和は、日本・沖縄の心であり、人の繋がりを大切にすることが自然に行えていくことが、子ども達の未来を明るく育んでいくことになると確信しています。